修 士 論 文 要 旨

学籍番号 22GH205 第 号	氏 名
人文社会科学専攻（コース：現代共生 ）	山田 侑真

論文題目
サー・アーサー・コナン・ドイルのシャーロックホームズ作品における男らしさ
(Masculinity in Sir Arthur Conan Doyle's Sherlock Holmes stories)

19世紀のイギリス、ヴィクトリア朝時代では産業革命から始まり近代化がかなり進んだ。社会の急速に発展に人々は不安に駆り立てられた。男女の役割が今よりもはっきりと分かれていた時代であり、男たちには共通のイデオロギーである男らしさという考え方があった。男らしさは肉体的な強さや騎士道精神、忍耐などの資質を含んでいるものであるとも捉えられているが、男性の行動や道徳の枠組みであるだけでなく、不安定な社会基盤を再編成し、安定させる触媒でもあった。しかし、世紀末に向かう中で男らしさに危機が訪れていたと多くの文化研究者は語る。この期間で男性に求められる資質は変わっていった。

その時代に活躍したシャーロック・ホームズはサー・アーサー・コナン・ドイルによって書かれた探偵小説の主人公であるが、第二作目でホームズが自分の仕事について語る際、「私は犯罪などの捜査において最後の砦であり、最高の法廷である」と述べる。さらには、難解な謎を解くことだけを求めていたにも関わらず、かの有名なライヘンバッハの滝からの復活を遂げた後には、「私の微力な力が及ぶ限り、私は正義の代表である。」というふうに事件や仕事への向き合い方が変わっていることがわかる。彼のこの態度の変化は、男らしさの変化に影響を受けながらも理想の男性像を表しているのではないかと仮説を立てた。

前期の男らしさは科学的であることだ。ホームズは自分の仕事に積極的に科学を取り入れる探偵であった。膨大な知識と、科学の手法である観察と推理を探偵に必要な素質として兼ね備え、犯人を割り出して捕まえたホームズは、事件によって崩れた社会の秩序に再び安定をもたらす。警察や犯人を出し抜いたホームズの知的で科学的であるという特徴は新しい男らしさの理想として最初に作者によって提唱されるのである。

しかし、この様態は変化を見せる。中期作品からはホームズの違う性格が強く光り出す。科学的であることは変わらず、それよりも際立って描かれる特徴があるのだ。中期作品での男らしさとして騎士道精神を体現する。私欲のために罪を犯す人間をホームズは断罪する。これは、ホームズが道徳的に人物になり、男性の規範から外れる行動をする男性を裁くからである。文学研究者のジョセフ・ケスナーはホームズが社会の秩序だけでなく、男らしさも監視しているのだと主張するが、この傾向が高まる時期こそ中期以降のより人間的になったホームズである。さらには、危機的状況に陥った女性を自分の身を挺して女性を守るようになる。

後期は正義と愛国心が男らしさとして反映されている。罪を犯したのが自己中心的な理由である限り、ホームズは警察に協力を惜しまず、罪を犯した人々に法の裁きを受けさせることを強く望む人間になる。ホームズの正義がやがて、国家に脅威を与える存在としてのスパイなどを捕まえることにさえ繋がる。一度探偵を引退した身であったホームズが、国家間の問題に対してイギリス政府の要請に応える形での復活を果たした作品もある。この行動はホームズの愛国心の表れではないだろうか。

ホームズの体現する男らしさは、各期間で移り変わったのではなく、徐々に獲得し、それまで持っていた男らしさと融合していったものだと考える。社会の不安を取り除くヒーローは、社会を安定させるファクターとして常に時代の変遷に合わせて望まれる男らしさの理想を体現していたのだろう。